2018年11月26日（金）西日本新聞

配慮不足で症状悪化も

医師や当事者 熊本市でシンポ

トランスジェンダーと医療考える

肉体の性別とは異なる性で生きるトランスジェンダー（TG）の人々が、医療機関で配慮の足りない対応をされることで受診をためらったり、症状を悪化させたりする問題が指摘されている。こうした現状を変えようと、TGが安心して受診できる医療機関の環境づくりを考えるシンポジウムが11月中旬、熊本市内で開かれた。当事者が実体験を語ったほか、医師らが配慮の実践例を示すなど意見交換し、問題解決への糸口を探った。（国崎万智）

シンポジウムでは、トランスジェンダーの当事者や医師が受診しやすい医療機関のあり方を意見交換した

シンポでは、3人の当事者が壇上に上がった。くみかさんは「ホルモン治療を始めてから体つきが変わり、病院に行くのをさらにためらうようになった」という悩みを告白。FTM（女性として生まれ男性として生活する人）のゆうさん(28)は「以前病院で嫌な思いをして、病状が悪化して倒れた友人もいる」と深刻なケースを報告した。

ゆうさん自身、「病院の受付スタッフと看護師で情報共有がされず、男性用トイレに入ろうとしたところ呼び止められ、事情を説明しても理解されなかったので、トイレを我慢した」ことがあるという。

熊本市の看護師めぐみさん(52)は、自身が勤める病院にFTMの人が入院する際、スタッフで話し合った上で個室を確保した例を報告した。ゆうさんは「医療従事者の取り組みにTG当事者が気付けるよう、ホームページなどで積極的に情報発信をしてほしい」と呼び掛けた。

多くのTG当事者が受診している長嶺南クリニック（熊本市）の平村英寿院長は「腫れ物に触るように接するのではなく、その人が嫌な思いをしないようにしながら、診療上必要なことは尋ねる姿勢が大切だ」と指摘。国立病院機構熊本医療センター（同市）の橋本聡精神科医長も「医療者側と患者が対等な関係でコミュニケーションを取ることが、TG当事者の医療アクセスの改善につながる」と述べた。

シンポを主催した支援団体「ともに拓くLGBTQ十の会くまもと」の今坂洋志代表は「当事者が医療にかかりにくいと思うのは社会の側の問題。受け付けから会計まで、多様な性が尊重される医療環境が一刻も早く実現してほしい」と訴えた。

ワードBOX

トランスジェンダー（TG）　心と体の性別が異なり、体の性別に違和感を覚えている人。性的少数者（LGBT）のTに当たる。体は女性として生まれ、男性として生きる（ことを望む）人はFTM、体は男性として生まれ女性として生きる（ことを望む）人をMTFという。トランスジェンダーのうち、性別適合手術など身体的治療を望む場合は性同一性障害（GID）という診断名で呼ばれる。

想像力を働かせて

長嶺南クリニック（熊本市東区）の平村英寿院長

2007年の開院から今年10月までに100人以上のTG当事者が受診している。当事者からは「戸籍上の性別と外見が異なるため、受付で何度も確認された」「望まない性別の病室で入院した」「問診票に男女の欄しかなく、丸を付けられなかった」という声を聞く。

当院では、受診時に本名をフルネームで呼ぶかどうか確認したり、通称名の記入欄を設けたりしている。他の対応としては、事前予約で他の患者と診察時間をずらしたり、待合室を分けたりした上で、ホームページなどで対応方針を公開するのも良い。まず、医療に関わるスタッフが想像力を働かせることが大切だ。

病院全体で研修を

性同一性障害学会理事長の中塚幹也医師（岡山大ジェンダークリニック）

大学病院でTG当事者にアンケートしたところ、FTMの場合、「他の患者の視線が気になる」などの理由で、特に産婦人科外来での満足度が低く、居心地が悪いと感じていた。一方、診察券の名前や性別を自分の希望通り記載されている当事者の満足度はとても高かった。検査技師の性別に配慮してほしいという人も多く、病院全体での研修が必要だ。

医療機関を受診せずにインターネットでホルモン剤などの薬を購入する当事者は少なくない。正確な情報がないまま、自己判断で治療を始めると事故が起こり得ることを知ってほしい。